
Made with AI
召喚士
エストリアと
愉快な仲間たち
林愛根

目次

１．地下迷宮 13 層フロアボス 1
２．グレーシア福音教会 3
３．ザイアース君 5
４．ザイアース君の過去 9
５．初めての夜 11
６．朝ごはん、そして出勤 12
７．グレーシア福音教会２ 14
８．フィル VS エストリア 16
９．地下迷宮 14 層１ 18
１０．ジェノベーゼパスタとお風呂 20
１１．エストリアの歌 22
１２．2 日目の夜 25
１３．聖剣の使い手 26
１４．破壊機兵ディサイプス 28
１５．ルクス君と買い物 30
１６．みんなでお夕飯 32
１７．３日目の夜 34
１８．日曜礼拝へ GO！！ 35
１９．日曜礼拝へ GO！！ ２ 37
２０．１４層フロアボス 39
２１．テレポーテーションの秘密 41
２２．シャイナータ聖花祭 42
２３．花火を２人で 45
２４．シャイナータの危機 46
２５．エストリアと王女エステト 48
２６．地底湖のボス 49
２７．ゲートキーパー 50
エピローグ 51
あとがき 53

目次

１．地下迷宮 13 層フロアボス

　他の人はみんな死んでしまった。ジャックもステファノのレジェンも！　今残ってるのはこの子たちと相方のルミナスだけ。あとはこのふざけきったタコの魔獣を叩きのめすまで！　浮遊しているタコの HP はまだそんなに削れていない、何とかしないと。
「ライアス、雷を撃ちまくって！！」
　魔鳥は身を翻し、雷を撃ちまくった、タコの魔獣は苦しそうにしているが、まだ効いていないようで、触手を思いっきりエストリアに向けて放った！
「危ない！」ルミナスは転移魔法によってエストリアを別の場所に逃がした。そのまま立て続けに詠唱する。
　タコ魔獣は攻撃魔法の準備を完了させ、猛毒の霧を放った！　この霧はとてもヤバく魔力を奪い、長く吸っていると死に至ってしまう。神経も麻痺し、動きが鈍くなってしまうのだ。
　「メルティカ！　私たちを守って！」
　メルティカと呼ばれた大きなスライムは防御壁となり、私とルミナスをかばった。ルミナスの詠唱が完了した。
　「ルナティック・フルムーン！！」突如、空間に赤い満月が浮かび上がった。この満月を見た者は、気が狂ってしまう。私は目を背けた。
　「ガァァアアァ！！！」タコの魔獣は気が狂ってしまったようだ、浮遊魔術が止み、地に落ちてしまう。
　ガッシャァァァン！！！！　タコの魔獣は地面に叩きつけられた。私は地上戦に強い召喚獣を思い出し、召喚の詔を唱える。
「深淵に潜む凍てつく氷の牙ギリメカラ、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」
「グアアアアアァ！！！！！」氷の魔獅子、ギリメカラが魔法陣から召喚された、白い体毛にたてがみ、オスライオンの彼はエストリアを守るために戦う。ライアスは深淵に帰ってしまった。
　ギリメカラは猛スピードで突進し、タコ魔獣に食らいつく、ピキピキピキッとかまれた付近が凍りつきタコ魔獣を困らせる。タコ魔獣は苦しそうに触手を振り回し、ギリメカラを叩きつけて吹き飛ばす。
「ギリメカラ！」私は叫んだ、彼が大丈夫なことは分かっているつもりだがちょっと心配して魔力を込める。呼応するようにギリメカラの体からは生気がみなぎり傷が回復した。ギリメカラはお構いなしに突っ込み、またタコ魔獣にかみつく、タコ魔獣は怒り狂い、触手をめったやたらに振り回した。
　ルミナスの詠唱が完了して、また大魔法を放った！「フォールザムーン！！」大きな月が天からすごい速さで落ちてきた。

　ドガアアアン！！！！　タコ魔獣は押しつぶされ、反応しなくなった、もう死んだのかな？

「タコ魔獣さん？」私は月の下をしげしげと警戒しながら見つめた。ルミナスの魔法で月が消えると下からクエスト成功の証の大きな魔晶石が一つ転がっていた。これは換金すると大きな金額になりそうだ。お互いレベルが２上がり、私はレベル 148、ルミナスはレベル 142 になった。

「よかった、倒したみたいね。でも犠牲はすごく大きかったわ。ジャックもステファノもレジェンも死んでしまった...。ここにお墓を作っておきましょう、エストリア」

「そうね。ここにお墓を作っておきましょう。私たちと共に戦ってくれた熱い戦友たちを」

　私たちはジャックたちの死体を土に埋め、石をそこにおいて、手厚く葬った。彼らのことを考え、涙を流し、感謝を込めて別れを告げた。また天国で会う日を信じて。

　ミドル―シ魔法国には埋葬に関する取り決めがあんまりない。葬りたい人は墓に葬り、山に埋めたい人は山に埋め、各個人の心境を大切にする。自然本来のやり方で生きる主の国ミドル―シ、賛否両論あるが、こういうのも悪くないかも。

　「よし、死んだ人の分まで頑張ろう。ジャックたちの死は無駄にはさせない。エストリア、下に続く階段に行ってみましょう、そこで、魔力の痕跡を残し、早く教会へ帰りましょうか」

「ええ、そういたしましょう、前を見て歩かないと私たちは！」

　私とルミナスは下の階に降りていく階段を見つけ、下に降りて行った。

　タッタッタ.....、下の階に行くほどムラムラと湿っぽく嫌な空気になっていった。地下迷宮は下の階に行くほど熱くなっているようだ。

　階段が終わり、ダンジョン１４層に着いた。ルミナスは魔力の痕跡を残し、次に来るときの布石を作っておいた。

　「さ、帰りましょうか、テレポーテーション！！」

　ルミナスの魔法で私たちは虚空に消えた、って、私、この魔法使えないんだけど！

２．グレーシア福音教会

　ぽわんっ―

「ふぅ、到着っと」ミルキーホワイトの髪のエストリアはルミナスに連れられてここ、グレーシア福音教会のエントランスに来た。ここはギルドのような仕事も請け負っているところで、報酬はギルドよりも高めに設定されている。

「あ、ルミナス、エストリア、無事だったんだね、みんなは！？」受付嬢のリサさんが話しかけてきた、心配してそうだ。

「...他のみんなは死んだよ、ジャックもステファノもレジェンもみんなあのタコモンスターの毒にやられてしまった。私たちだけが生き残って、倒し、ジャックたちは埋葬してきた。彼らの死は無駄にはしない。私たちの明るい未来のために頑張ることにする」私は答えた。

「そうでしたか...明るいジャックも聡明なステファノもやり手のレジェンも.....。.....遺族たちに直ちに報告し、教会として彼らの葬儀を執り行いたいと思います！」

「お願いします、本当にいい人たちがあんなモンスターにやられて悔しいです。私たちの力量不足ということで、これから頑張っていきます」

「そう堅くならないで。彼らが殉職したのは全く君らのせいじゃないから。ただ、神様がもうこの人はここまででいいと線引きしてくれたのよ。あまり深刻に考えないで」

「そんなものでしょうか？　まあ、そういっていただけて嬉しいです、ありがとうございます！」

「お、いつものエストリアちゃんっぽくなってきたね。君たちが浮かない顔してるとこっちまで心配だよ。あまり深刻に考えないでね☆」

「はい！　分かりました。あとあと、タコのモンスターが落とした魔晶石です。大きいでしょう、これ！　換金してくださいませんか？」私はポケットに入っていた魔晶石を取り出した。紫色のアメジストのようにそれはキラキラと輝いていた。

「おお、これは大きな魔晶石だね、重さは...1129 ｇか...46800LYRE ってとこだね。ではこちらがその代金だよ、受け取ってね☆」

　魔晶石は私たちに必要なポーションや魔道具の材料、武器や防具の素材、町を動かすエネルギー等いろいろなことに使われる万能な石。魔物たちが落とすのがちょっと面白いけどw

「はい、ありがとうございます！　今日はもう帰りますので、明日のクエスト、よろしくお願いしますね☆♡」

「はい、明日また会いましょう。主にあって安らかに眠れますように.....」

☆　☆　☆

「じゃあ、エストリア、私はもう帰るから、また明日よろしくね☆」
「うん、また明日会おうね、死なないように！」
「あはは、死なないようにね☆　テレポーテーション！！」
　瑠璃色の髪のルミナスは虚空に消滅した。この技、私も使いたい！　なんでも記録してあるところと、近くにしかテレポートできないらしい。それにたくさんの場所は記録できないみたいだけど...。
（ううん、今できることをやる！　できないことはそのうちできればいい！　私も家に帰ろうかなぁ.....）
　シュイン☆―
　あ、流れ星だ、お願い事しようかな？　この終末に彼氏ができますように！！

３．ザイアース君

「ふふふ～ん♪　地下迷宮 14 層到達を記念して、チョコホールケーキを買ってきました～☆♡　ラ・パルンのケーキってとってもおいしいのよね～☆　みんなと一緒に食べましょう、さ、みんな、おいで～☆」

　私は召喚の詔を一つ一つつぶやき、召喚獣たちを呼んだ。召喚獣ギリメカラ、召喚獣ライアス、召喚獣メルティカは私のもとに来た。他にも召喚できるんだけど、契約を結んでるのはこの子たちだけなので……。ほんとに可愛い子たち、食べちゃいたいくらい♡

　と、ここで私は新たな召喚の詔が思い浮かび、私はすぐに召喚の詔を唱えることにした！

「邪悪なる者の真王、禍々しき力ザイアース、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

　部屋によどんだ紫の魔法陣が現れ、その中心より、暗黒の真王が姿を現した。彼は灰褐色の皮膚をして、上半身裸の見るからに悪そうな、最悪な魔族だった。

「お呼びですか、マスター？」

「おおお、お呼びですかって！？？」魔族だ、魔族が現れた！　怖い！　あ、ギリメカラが威嚇してる。上半身裸って！　見ちゃうじゃない、どうすんのよこれ！

　私は人型の使い魔の原則を想い出した、人型……は召喚者の伴侶になるために現れるのだと。その場合は……。

「はぁ……まぁいいわ。さあザイアース来なさい、そして目を閉じて……」

「はい、マスター」何この子かっこいい☆　この子は……

　エストリアはザイアースに唇を重ねた。口周辺が熱く、喜びを伝えている。

「ぷはっ。これで契約は完了だよ、ザイアース。あなたは私だけの使い魔だよ」

「……」

　ど、どうしたのかしら、嬉しくないのかしら？　私だって可愛い女の子だと思いますけどぉ！

「指令は何ですか、マスター。聖都を滅ぼすことですか？　暗殺したい人がいるんですか？　いずれにしても僕はすごく役立つと思いますよ」

「な、なな、聖都を滅ぼすんじゃなくて地下迷宮を一緒に攻略して欲しくて……。あと私の護衛……」

「それならお安い御用ですよ。ただ仲間を殺すのはちょっと心外だなぁ……俺たちは人間界の崩壊を願っていただけだから」

「なっ、なんでそういうことをするんですか！　めっちゃ迷惑なんですけど！」

「俺たちにいい心なんてないんすよ。愛とか正義とか言ったって分かんないんですよ。それより幸せにしてるやつらの幸せをぶち壊してる方が楽しくて面白いし、その悲愴に満ちた顔を見るのが……」

「やめなさい、ザイアース！　あなたは私の使い魔なんだから、人間のために力を使いなさい。あなたの特技はなんですか、聞いてみたいです……」
「吸収魔法です。まずMPから奪うのが基本で……」
「聞くんじゃなかった！！」なんなのこの子、ヤバい、ヤバすぎるわ！　まぁ、かっこいいし、根っからの悪人じゃなさそうだ、私には素直だし、そこはよかったけど……。
「自己紹介がまだだったわね。私はエストリア。召喚士でピアノが趣味です。好きな食べ物はパンケーキ。これからよろしくね☆」
「エストリア……いい名前だな」
「うふふ、ありがとう。ザイアース君もかっこいいね♪」
「う、うん……」あらやだ、照れちゃって可愛いw
「まあ、みんなでケーキを食べましょ♪　ザイアース君はケーキ食べたことある？」
「ない」
「じゃあ食べてみましょ♪　あ～んしてあげる、ほら口を開けて♪　あ～ん」
「あー」
「はい♡」
「あ、ぱくっ、むぐむぐ……うまい、これはうまいなぁ！」
「うまいですかw　ケーキうまいですねw」
「エストリア好き……」
「え？……私好き？」
「好き」
「じゃあキスしてあげる。ほらこっち向いて！」
「うん」
「ザイアース君……ちゅ♡」
「ん、エストリア……」
　と、その時、メルティカが嫉妬して私に覆いかぶさってきた。この子は私の体が大好きで、私とイチャイチャするのが大好きみたい。メルティカは私のおっぱいをムニムニと揉んでいた。
「な、なんですか、このスライム！　ぶっ殺していいですか？？」
「だ、ダメよ！　これは私の召喚獣メルティカ。スライムでエッチなことが好きなの。私の体が大好きなの、分かりましたか？？」
「まあ、そういうことならよ、だったら俺も触りたいくらいだぜ」
「え？　少しくらいならいいけど……」ちょっと恥ずかしいけどこれもザイアース君のため、仕方ない。
「ほら、触ってみて♡」私は自分のおっぱいをザイアース君に向けて差し出した、Cカップはあるので小さくはない。ザイアース君は私のおっぱいを揉み揉みしてすごく幸せそう。
「はい、ここまで！　満足できましたか？」
「今まで触ったので一番よかった」えええ、他にも触った子がいるの、今まで何してたんだろ？
「一番で何より♡　ザイアース君は今まで何してたの？」

「魔王とか魔界のエリートとか、とにかく人を殺したり奪うのが仕事だった」
「それは仕事って言いません！ w　詳しく教えて！」
「いいけどよ、少し長くなるぜ」



BCO.364c024e-d0d3-44fb-9aa8-1a1eb8fe3e39.png

４．ザイアース君の過去

　チョコホールケーキをみんなで食べ終わると、ザイアース君は口を開き……
「聞いてくれるか？」ザイアース君が恐る恐る聞いてきた。私は大きくない胸を張り、「うん」とうなずいた。
「俺はな、かつてあったデストラド帝国の元魔王なんだよ」え、あのミドル―シと戦って負けた、あのデストラド……。確か聖女に負けたって……。
「そう、俺は聖女に負けた。あいつはすごかった、完全に”聖”属性の技しか使わない、誰が来てもひるまない、俺たちが聖属性の技が苦手だからってあんまりだよな、俺はおろか配下の魔族、魔獣たちはほとんど滅ぼされてしまった。俺は殺され、魔界に落ちた、俺は誓った、ろくでもない人間どもに血の復讐を果たさないとなぁ！　って」はぁ……もう何を聞いても驚かないわ、聖女アステナって強かったのね、私とはタイプが違いそうだけど、アステナさんの信仰って素敵だなぁ、きっと聖書しか読まなくて、福音を伝える働きとか真面目にしてたんだろうなぁ！
「聖属性しか使わないってすごいですね、確かに復讐したくなってもしょうがないかもしれませんね」
「ああ、俺を殺すんだからな、許さねぇよ、魔界に落ちた俺は認められて魔界帝ガイノスの３柱、序列は４位の大魔族になった。気力のなえた者からエネルギーを奪うのが俺の仕事で、みんな苦しそうに野垂れ死ぬんだ。あいつらの断末魔を聴くのが……」
「な、なんですってー！！　……まあいいです、もうあなたは私の使い魔、受け入れましょう。あなたは私だけの使い魔なんですからね、自覚するように！」
　ふっと、ザイアース君がちょっと泣いてしまった。魔王が泣いてる、ヤバい、キュンって来ちゃう！
「俺はこんなに優しくされたことないからよ。手下も俺を殺そうと狙ってるし、勇者どもは俺を殺そうとするし、ろくな奴はいない。だが、エストリアは違った！　俺にキスもしてくれるし、ケーキも食べさせてくれる。こんなに優しくされたことはない、エストリアは本当に優しい」
　私は大きくもない胸をそらし、「まあ、旦那様に優しくするのは伴侶の務めですからねぇ♪　こんなにかっこいい旦那様に会えて私は嬉しぃです♡　私は一生ザイアース君を愛します♡」
「エストリア……」
「ザイアース君……♡　私は幸せですよ、こんな旦那様がいて♡　私たちはいつまでも一緒ですからね！ ♡」
「エストリア……俺もエストリアを愛するよ……」
「ザイアース君……君は今日からルクス君です、今までのことは忘れて、私たちは愛し合いましょう。ルクス君……ちゅ♡」

「ん、エストリア……好き……」私はルクス君の首に腕を回し、熱心に口づけした。ルクス君も一生懸命私とキスしている。

　召喚獣たちが怪訝な顔をしている。主人は魔族と愛し合い、熱烈にキスしている。みんなケーキを食べて満足そうだが、ギリメカラもおいてけぼりにされて寂しそうだ。

「わーった、わーった！　　ほらみんなこっち来て！　　はいいい子いい子、わしゃわしゃわしゃ〜、みんな可愛いね〜♡」ギリメカラもたてがみをさすられて満足そうだ、ライアスもさすられて幸せそう。メルティカは私の口に体を突っ込み、ディープキスを楽しんでいる。

「俺もしたいんだけど……」私は幸せそうにはにかんだ。

５．初めての夜

　そろそろ就寝時間だ。ルクス君たちと眠りにつくことにしよう。いつもは召喚獣たちと一緒に寝てたけど、今日はルクス君が隣！　ね、ルクス君？？
「女の子の部屋……とても可愛らしぃ……」そうでしょ、そうでしょ？
　私の部屋はピンクを基調にしていて、可愛らしぃ小物たちを飾っている。カップの蛍石のさざれ石にアロマオイルを垂らしてムードを醸し出した。甘いイランイランの香りが私たちを甘い夢に誘う。
「さあ、ギリメカラもライアスもメルティカも一緒に寝るわよ。明日も戦いが待ってるから、みんな心してかかるように！　今日は疲れたし、みんな寝ましょ。ルクス君も一緒に寝よ♪」
「……」ど、どうしたのかな、ルクス君？？
「エストリアとしたい……」え、私と？　召喚獣たちもいるしなぁ、じゃあ……。
「おっぱい触らせてあげる♪」私は上着を脱ぎ、柔らかい乳房を月明りの下はだけさせた。そしてルクス君の肌にピタッとつけ、「今日はこのまま寝ましょ、大好きなルクス君♪」
　ルクス君はエストリアのおっぱいの感触を味わいながらゆっくりと眠りにつくのだった。

６．朝ごはん、そして出勤

　私たちはパンと目玉焼きとウインナーとサラダとカフェオレで朝食を摂ることにした。召喚獣たちにも同じようなご飯をを与えている。召喚獣たちも同じような幸せを受けて欲しいから。とにかく焼いたパンっておいしいわよね。ルクス君も喜んでくれるかしら？
「うん、おいしい」ルクス君はおいしそうに食べている。うん、気に入ってくれたみたい。
　ルクス君は困惑したような顔を見せ、「なんだか、エストリアに召喚されてから、悪い心が起こらなくなってしまい、魔族として、これでいいのかと困惑している。人を殺したいとか奪いたいが減ってしまい、これでいいのかと思っている」私はその気持ちを受け止めてあげて、
「そう思うだけでもいいのです、あなたには私がいるんだから……ルクス君が悪い子じゃないってこのエストリアにはお見通しですよ♡」
「エストリア……」
　ギリメカラたちもお皿をめちゃくちゃにして食事を済ませた。こらーっ、誰が片づけると思ってるのー！！　私たちはこの子たちが大好きだった。

☆　☆　☆

「俺は教会なんざ行きたくないぜ！！」嫌がるルクス君の手を引き、
「ダメーッ！！　行くのぉ――っ！！」と私はルクス君を無理やり引っ張っていく。
「俺は聖書が嫌いなんだ――――ッ！！！　あんなものがあるから俺たち魔族は……」
「ルクス君、いいから行くの――――っ！！！」まったくルクス君は手間がかかる。まるで子供みたい。まっ、いっか、可愛らしぃし。ルクス君は私の使い魔なんだから大事にしないと。この子は私だけの使い魔なんだから。
　地下迷宮は最奥に魔界に繋がるゲートがあるようだ。地下迷宮は魔物や魔族の巣窟で、ゲートを隠すために迷宮化しているらしい。この聖都シャイナータは大結界で守られているので一応安全である。地上の魔族はほとんど淘汰されてしまったが、まだいるので、油断できない。そんなことを思いながら教会へ歩いていると……
「何あれ、魔族よ、エストリアと歩いてる……」「怖い」といろいろな声が聞こえてきた。
　ルクス君はつかつかと歩いて、お婆さんに食ってかかり、「てめえ、よくも俺様にそんなことが言えたなぁ……後悔させてやる！」
「やめなさい、ルクス君、お年寄りにそんな……、もうちょっと優しく……」
「うるせぇ！　俺様の力を見せつけてやるぜ！！」
「ルクス君、やめてくださいね……！！」私はすごんでいった。ルクス君は苦々しい顔をして、掴みかかっている手を離した。

「ルクス君、自分がされて嫌なことはしちゃダメですよ？　あなたは私だけの使い魔なんだから、同じ人にも優しくできるようにしなさい。分かりましたね？？？」
「わ、分かったよ、多分もうしない」私はにまにまと笑って「よろしい！」と言った。

７．グレーシア福音教会２

「おお、ここが憎々しき教会.....」ルクス君が教会の建物を見上げ、言った。
「そういうこと言わないの！　さっ、入るわよ」
「もうどうにでもなれだ！　入ってやるよ、まったく」私は目を輝かせ、
「よくできました、ルクス君、君はほんとにいい子ですね、流石私の使い魔、ほんとにいい子ですね☆」
　私たちはエントランスに入った。瑠璃色の髪のルミナスはもう私を待っていた。
「なんで魔族がいるの？」ルミナスはきょとんとしている。
「私の使い魔なのよ〜、この子は私と結ばれて夫婦になってるのよ〜♡」
「魔族と夫婦？　大丈夫なの？」
「お、いい女だな、お前、俺の.....」
「こら！　ルクス君、浮気は絶対ダメですからね.....」私はぎりぎりとルクス君を注意した。この子は徹底的に縛っておかないと何するか分からない。
「わ、分かったよ」
「分かってません、あなたはあなたは私の使い魔なんだから.....」エストリアは何でこの子のことがこんなに好きか分からなかった。ただもう魔法がかったようにルクス君が好きで、エストリア自身困惑していた。大切なエストリアの恋心はもうルクス君に奪われていた。
　受付に行き、私は教会員の証であるカードを見せ、話を伺った。
「なんで、魔族がエストリアと一緒に来るのですか？」受付嬢のお姉さんは言い放った。
　私は事情を説明して、「いや、この子は私が召喚したルクス君です。今は私の使い魔で人に害を与えるような子じゃありません。今は私と愛で結ばれ、この子には良心が芽生えています」
　受付嬢のお姉さんは、「なるほど、召喚して使い魔として使役しているのですね。それならあなたの言うことを聞くのはもっともです。分かりました、それならいいです」
　受付嬢のお姉さんは納得してくれたぁ〜よかった〜〜♡
「ダンジョン 14 層はとても強い敵で溢れています。今回は護衛としてエルフのフィルも同行させることにします。ただ、もう 14 層ともなると同行できる者も少ないので.....。ルクス君もいるし、手分けして下に繋がる階段を探しましょう。よろしくお願いいたします」
　私は快く承諾して、「分かりました、なるべく早く下に繋がる階段を見つけるようにしますね」
　一礼して私たちは受付を離れた。フィルと呼ばれたエルフの子はうやうやしく、私たちに一礼した。フィルはとても大きなおっぱいをしていて、ルクス君はそれを恥ずかしいとも思わず、まじまじと魅入っていた。

私は深い失望と嘆きと独占欲から……「ルクス君……何を見てるのかな……〆」とルクス君を叱り飛ばした。

ルクス君は反省したような顔を見せ、「いや、エストリアのが一番だからな」と言った。

フィルの顔はみるみる赤く上気し、「や、私のおっぱいが一番ですぅ〜〜〜〆〆〆」と言った。

８．フィル VS エストリア

ルミナスのテレポーテーションで魔力の痕跡を残した地下迷宮 14 層へたどり着いた。

14 層はムシムシと暑苦しく、不快な感じがした。

フィルとエストリアはまだいがみあっているようで、目も合わせようとしない。ルミナスはあきれたように、「そんな風にいると命を落としてしまうかもしれませんよ」と冷静に言った。

エストリアは観念したように「分かったわ、それにしても熱いわねぇ」と言った。確かにこのままではよくないことも分かっている。

「この人はルクス君というのですか？　かっこいいですねぇ‼」フィルは目を輝かせた。

ルクス君は調子に乗って、「ま、俺にかかれば聖都も魔界もすべて掌握できるがなぁ！！」と言い放った。「俺は強いんだ、全員俺に従わせる。逆らうやつは犬のえさだ」

「すごいですすごいですすごいです～♡　ルクス君は言うことが違います～♡」

エストリアはあきれ返り、ルクス君の腕をつかんだ。「ルクス君は私だけの使い魔。ルクス君と私は永遠に一緒に暮らすの。ずーっとずーっとルクス君と暮らして、二人だけの王国を築くのよ～～～♡♡」

フィルは驚いて、「な、なんですって～～～〆　そんなの認めないわ！　私だって私だってルクス君とイチャイチャするんです～～♡」

フィルはルクス君の腕をつかんだ。バチバチと火花が飛ぶ。もはやルクスですら仲良くすればいいんじゃないかと思っていた。

しばらく通路を歩いていくと魔獣の群れに出会った。ソードダンサーが剣をこちらに向けて飛ばしてきた。彼らは骸骨で剣を操ることができるらしい。

俺は剣をひらりとかわし、魔術を詠唱する。詠唱はすぐ完了し、得意の魔法を放った！

「リーゼルエルキューサー！！」

「ぷっ、なんですか、その技はぁ！ w」フィルが笑っている。

剣は勢いを失い、ひらひらと地面に落ちた。「リーゼルエルキューサーは相手の MP を奪う、俺の基本の技。あと、魔力が下がった相手からァァ！！　スキルスティール！！

フハ、フハハハハハ！！！！！！」

ルクス君の手から剣が出現し、ソードダンサーに向けて剣を放った。ソードダンサーは持ち前の剣で応戦するが、ルクス君の剣に耐えられない。

「フハハハハハ！！！！　そして HP が下がった相手からァァァ！！！　デッドエンドキル！！！！　フハハハハハ！！！！」

もう体力のなかった骸骨はルクス君の即死魔法で、跡形もなく姿を消した。カランと魔晶石が落ち、戦闘終了の合図となった。

「すごいですすごいですすごいですー！！　こんな戦い方初めて見ましたぁーっ！！！

ルクス君は天才☆ですー！！！！」

「ちょっとフィル、私の使い魔に……。私は妻なんですよ、ねぇ、ルクス、今の魔法どうやってやったの？　跡形もなく消えちゃったけど」私はルクスに聞いてみることにした。
「俺はな、HP が 15 %以下になった敵を問答無用で即死できるんだ。命を奪うにはこれくらいの体力以下が重要で……」
「最低ですー！　最低でも強いですぅ――っ！！」
「ほんと最低だけど、強いわねぇw　ルクス君は私だけの使い魔ですからね。ちょっと離れて……」
「まあ、エストリアも抑えて……。ここは仲良くダンジョンを攻略しましょ☆　死んじゃうわよ？」ううん…ルミナスが冷静に突っ込んできた。確かにそうかも。
「分かりましたよぉ、そうすることにします」私は観念して、諦めることにした。
「まぁ、俺はエストリアが好きだけどな」え！？　ルクス君……！！　ルクス君は続けて説明してくれた。
「エストリアは俺に愛を教えてくれた。俺と一緒にいたいということであれば、俺もそうしたい。俺は魔族だけど、エストリアへの愛だけはまともだ」この時だけはルクス君が神様に見えた。ルクス君は私のことを想ってくれた！　嬉しぃ！！
「ルクス君……ずっと一緒だよ♡」私は天にも昇る気持ちだった。

９．地下迷宮 14 層１

「まぁ、別にいいですけどぉ！　お二人は幸せになってくださいねw」フィルは認めてくれたようだ。まあ、仕方ないかw
「はぁ、ルクス君かっこよかったのに……。魔族とエルフのハーフって素晴らしいと思うけどなぁ！」
「ダメです！　認めませんからね！」何それ、全力で否定しないとw
「美しいエストリアに忠誠を捧げます。僕は使い魔として全力であなたをお守りしたいと想います」
「ルクス君……!!!」
「ヤバい、メロドラマ化してるわね、魔族と美少女サモナーって絵になるわぁ……」ルミナスが嘆息する。
「ベストチョイスでしょぉ、これぇ！！」私たちはベストオブカップルなのよぉぉ!!!
私の魂の叫びはこだました！
　通路を歩いていると、モンスターが出てきた。今度は死神のような亡霊とミノタウロスナイトの群れだった。私はすかさず召喚の詔を唱える。
「古き深淵の怒りの雷ライアス、暗黒より生まれし魔メルティカ、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」
「グアァ――――ッ！！」ライアスとメルティカが出てきた。ライアスは山吹色の可愛い色をしている。
「やっておしまい、ライアス、サンダー乱れ撃ち！！」
「リーゼルエルキューサー！！」
　死神はテレポートし、私たちの視界から消えた。ライアスの雷はミノタウロスナイトに直撃した。2 体のミノタウロスナイトが消滅した。私は立て続けに雷を放つ。ルミナスは詠唱を続けている。
「眠れる木々よ、目を醒ましなさい！！！」フィルは木々を呼び覚まし、辺り一帯に爆発的に木々が育った。木々はミノタウロスナイトにまとわりつき、剣で応戦するものもすごくうざそうだ。
　死神は HP を半分にする呪いを放ってきた。俺は昔奪った魔法反射でエストリアと俺を守り、死神の HP を半分にしたが、ルミナスとフィルは食らってしまった。そしてリーゼルエルキューサーを続ける。ミノタウロスナイトはもう MP が切れただろうな。
「フルムーンショット！！」ルミナスの詠唱が完了し、白い満月が浮かび上がり、そこから光の筋がミノタウロスナイトと死神を討つ。月の光は見えない敵が見えるようだ。
　木々は槍となり、ミノタウロスナイトを襲う。ミノタウロスナイトはそこら中で串刺しの憂き目にあっていた。

「みんな HP が下がったようだなァァァ！！！　デッドエンドキル！！！！　ヒャハハハハ！！！！！」ルクスの即死魔法で HP15 %以下になったモンスターたちはすべて消滅した。残党も私の雷がすべて一掃する。こうして戦闘が終わり、魔晶石が当たり一面にカランと落ちた。
「フィル、ルミナス、大丈夫？」私は HP を半分にされてしまった、フィルとルミナスをかばった。
「大丈夫です。木々の癒し！！」フィルの放ったヒールが私たちを癒す。「木々の癒しの回復量は辺りにいる木々の量で決まるんですよ♡」
「おお……！」ルクス君が感心している、こら、感心するな！

１０．ジェノベーゼパスタとお風呂

　私たちはダンジョンの地形を魔具ステルズに記憶させてから、帰ることにした。ダンジョンの探索は一日では終わらないので、しょうがない。ルミナスのテレポーテーションによって、帰った。
　家に帰り、私はみんなを呼んだ。召喚獣ギリメカラ、ライアス、メルティカは私のもとに馳せ参じてきた。ほんとに可愛い子たち、いい子いい子。
「今日は、ジェノベーゼパスタとサラダとカフェオレにしましょう。久しぶりにジェノベーゼ作っちゃうよ〜♡」
「パスタか、いいな！」そうでしょ、そうでしょw
「まずは〜〜、お湯☆を熱します、そして、沸騰したら、パスタ投入〜☆　そして茹でてる間に、ベーコンを炒めて、パスタが茹であがったら、フライパンでバジルソースをかけて、はい！　　完成☆♡　全員分作ってあります。さっ、召し上がれ☆」
「これはうまそうだな」ルクス君が喜んでる、よかった〜♡
「うまそうねぇ、ほらギリメカラも、これを食べて☆　ライアスもメルティカも食べて、これはおいしいから、あ、バージンオイルかけてね、おいしいから☆」
　私に促されて、みんなが食事を取り始めてる。ギリメカラは相変わらず、汚いけど可愛い。ライアスはまだいい。メルティカは全部丸のみ、はぁ〜♡
「これはうまいなぁ」
「でっしょ〜♡　私の愛情メニューはお店が作れるよ♡　ルクス君が気に入ってくれてほんとによかった」
「エストリアが作るものだったら、なんでもいいよ。お前は俺だけのものだからな」うんうん、それでいいざんしょ♡　私はルクス君を見つめ、
「好き♡」とつぶやいた♡

「さぁ！　　みんなお風呂入るわよ〜〜〜♡」
「お、風呂か」
「ルクス君も入ります♡　一緒に汗を流して日頃の疲れを癒しましょう。ほら、ルクス君も脱いで、みんなもお風呂場へ GO！！」
　私たちは脱衣所で脱ぐことにした。ルクス君はおもむろにズボン？ を脱いだ。キャー！！　　大きいんですけどぉ、ルクス君の！　　ちょっと嬉しぃかも♡
　私はみんなの前で、お洋服を脱いだ。柔肌の面積が増え、私の裸がどんどんみんなの前に、きゃー！！
「ルクス君、いかがでしょう？　　私はあなたのものですよ？　　こんな私を抱きしめたいでしょう？」

ルクス君は距離を詰め、私の首を抱き、熱いキッスを私にしてきた、キャー！！

私は抵抗する間もなく、一生懸命にキスしている。ヤバい、18 禁になっちゃう⁉

「俺はエストリアがいて嬉しぃよ。お前に危害を加える奴には、死の制裁を必ず食らわせるから」うん、時と場合によりいいね♪

「ルクス君、私たちは永遠に一つ、isnt,it？」

「エストリアのおっぱいが一番いいよ。今までの中で一番いいよ☆」

「ルクス君.....‼‼」

「エストリア.....」私たちは見つめあい、浴室へ入った。ギリメカラたちにもお湯を浴びせかせ、一緒にお風呂に入った。

「ルクス君、気持ちいい？」

「エストリアのおっぱいが気持ちいい」ルクス君は始終私のおっぱいをいじくっている。私は弄ばれ、感じてしまう。ルクス君のことが頭いっぱいになり、私はもっとして欲しくてたまらなくなった。ルクス君の優しい愛撫に私は気持ちよくて、声を抑えた。

「う、あ、ルクス君、気持ちいい、あ！」ヤバい、もうダメ、R 指定入っちゃうまずい‼

すると、メルティカが嫉妬して、私の口に体液を突っ込んできた。メルティカはこれが好きで、おっぱいも弄び、私をめちゃくちゃにした。ギリメカラも私しか見ないし、はぁ.....。

ライアスはメスだけど、私の体が好きそうで、こちらを見ている、はぁ.....。

「ルクス君、お背中流してあげる、さっ」私はルクス君を促した。ルクス君は浴室の椅子に座った。

私は石鹸の泡をおっぱいで泡立て、ルクス君の背中をおっぱいで洗った。ルクス君も気持ちよさそうだ。

「ほら、みんなも！　私のおっぱいで洗ってあげるわ！」私はみんなをおっぱいで洗った。みんな気持ちよさそうに、幸せそうだった。私もみんなを愛せてとても幸せだった♡

１１．エストリアの歌

　お風呂から上がって、私はルクス君に提案した。
「私、ピアノが趣味なの。自作曲もあるんだよ、聴いてくれる？」
　ルクス君は目を瞬かせ、「きっときれいな歌なんだろうな、聴いてやるよ」と言った。
　私はウィンクして、ピアノ台の前に座った。この曲は伴奏つきですべて私が作った。主を賛美する礼拝向け賛美で教会で歌われることもあった。
「ではいきます。すべてあなたの愛で」
　ポロロン、ポロロン、ポロロンポロロン～♪

　誰も同じ人はいない、一人ひとり大切に造られた♪
　私も同じように、大切に造られた♪
　主はすべてを特別に造られ、すべて同じものは存在しない♪
　あなたは私たちを大切に造られた、すべてあなたの愛で♪

　人を大切に想う心が、私たちを幸せにする♪
　人々迷い、道に迷い、幸せを探す♪
　主を愛して迷いは消える♪
　私たちに必要なのは、すべて主の愛♪

　私たちを大切に造られた　あなたは何て偉大な方♪
　あなたはすべて与えてくれた　限りない愛を♪
　あなたは愛してくれた　小さき私を♪

　ジャ～ンと私は演奏を終了させた。この歌は神様の愛の尊さを歌った歌だ。神様がどれだけ私たちを大切に想っているか、このか弱き私を見過ごさないで愛してくれた主の愛を歌った尊い歌だ。
　ギリメカラたちも安らいで聴いていた。この子たちは私の曲が大好きで耳を澄ませて聴く。
　どうどう、ルクス君、気に入った？
「う～ん、主とか嫌いだな、呪われそうで」な、なんですって～～↓　呪われそうって私の配偶者を主は呪わないよ。
「ううん、主はルクス君を呪わないよ。ルクス君を大事に想ってるよ。私よりも大切に想ってると思うよ」
「そうかな、絶対呪ってくる！」だ～か～ら～、ルクス君は！

「ルクス君を造った主は呪わないよ。私を愛してる人を呪ったりしないよ」私はルクス君を抱きしめた。
「あ、あ、エストリア……」
「ルクス君、どうしたの？」いつもと様子の違うルクス君に戸惑う。
「俺の中から悪い心が消えたみたい。エストリア、愛してるよ！」な、なんですってー！
「おお、ルクス君から悪い心が！　じゃあ吸収魔法はどうなるのかな？」
「それは分からないけど、俺、聖属性魔法もいくつか使えるし……」
「Whats!?　なんですって!?　スキルスティールで？」それは強そうだ、ヤバい、かっこいい♪
「そう、アステナからも奪ったことがある。あいつの最強聖魔法はコピーできないけど、他の技なら」気になる気になる。
「最強聖魔法って何？」
「聖なる光によるまがまがしき者へのダメージ。まがまがしさの大きいものほど大ダメージ。詠唱に時間がかかるけど、俺は一撃で死んだ」
「ルクス君……」
「まあ、戦闘の方は大丈夫だ。何とかなるよ」
「ちょっと心配だなぁ……。優しさでダメになっちゃうんじゃない？」
「エストリアにひどいことをする奴に手加減はしない」
「ルクス君……なんてお礼を言ってよいのやら。私はルクス君を永遠に愛します。最後までダンジョンを制覇しましょう♪」
「分かったよ、エストリア、俺はやってやるぜ！」肌も少し白くなったルクス君ははにかんで言った。



BCO.c3c18374-d84c-446f-9565-1e874afe9428.png

１２．２日目の夜

「ふぁ〜あ、そろそろ眠くなってきたわね、みんな寝ましょ♪」私は眠くなったので、みんなと寝ることにした。
「ギリメカラもよくやってくれたわね、偉いわ、いい子いい子わしゃわしゃ〜」たてがみを撫でられ、気持ちよさそうなギリメカラ。可愛らしぃ。
「ライアスもよくやってくれました。可愛いですね☆」ライアスも撫でてあげる。撫でられたライアスは気持ちよさそうにしてる。
「メルティカも私を守ってくれてありがとうね。私の体を好きにしていいよ」メルティカありがとう！
「ルクス君、今日も一緒に寝よ。あなたと一緒に寝るの楽しみ！」私は想ったままをつぶやいた。
「可愛いエストリアと一緒に寝れるなんて幸せだよ、ありがと」魔が消えかけてるルクス君は優しく微笑んでくれた。私は心嬉しく想い、ルクス君をベッドに誘う。
　私は上半身を裸にして、可憐なおっぱいをルクス君に見せつけた。ルクス君はもの欲しそうにしている。
「このおっぱいはルクス君のものですからね！　　勘違いしないようにw」ルクス君に優しく話してあげる。私は興奮して息が少し荒くなる。
　ルクス君とベッドに入った。私はルクス君にキスをしてルクス君を誘った。ルクス君も私にキスを返し、私のおっぱいをもみほぐした。私はたまらなく嬉しく、されるがままになっていた。
　私は召喚獣たちの前で犯されてしまった。ルクス君は私のすべてを奪い、私は気持ちよく何度も達した。私はいつまでもこの人と一緒にいれないかなと犯されながら想った。

１３．聖剣の使い手

　次の日、教会に行くと、ルミナスとフィルがいた。私はルクスから悪い心が消えたいきさつを語った。彼女たちはこう言った。
「それはよかったですね〜☆　エストリアの愛が伝わったんですね〜☆　おめでたですね☆♡」フィルはこう言ったが、間違いではない。私とルクスは夫婦なのだ。誰にもはばかることない。
「にわかには信じがたいけど、ルクス君、肌の色がちょっと白くなってるね。主の愛が彼を変えたんですね、おめでたですね☆」ルミナスまで〜、何言ってるの〜もう！///　恥ずかしぃけど幸せですね☆
　教会の受付に行き、今日のクエストの任務を聴き、支給品をもらいダンジョンへ行くことにした。
　ルミナスはテレポーテーションを唱え、私たちは虚空に消えた。

☆　☆　☆

　ダンジョン 14 層に着いた。ルミナスが魔具ステルズでダンジョンの状況を確認した。
「昨日はここまで探索して、こっちは行き止まりだから、こっちに行きましょう☆」ルミナスが的確に指示を出す。ルミナスちゃんはほんと頭がよく頼りになる。素敵なお姉さんだ。
「エストリア、昨日はどこまでしたんですか？　　教えてくださいませんかw」フィルが意地悪な質問をする。私は昨日の光景を想い出し、赤面してしまった。
「気持ちよかったとだけ伝えておくわ。ルクス結構上手で///」私の初めてを奪ったルクスはとても上手だった。私はこんな危険なダンジョンで何を想ってるんだろうと想った。
「フィル、あんまりエストリアをからかっちゃダメよ。彼女は今幸せのただなかにあるからそっとしておいてあげましょう☆」ルミナスありがとう〜♡
「何話してるんだ、まあ察しはつくんだけどな」察しつくんですか！　　やめて〜///♡
「あんまりエストリアをからかうなよ、そういうことはするんじゃない」ルクスかっこいい☆　素敵☆彡　かっこいいルクスに見惚れていると……
「あ、天然の魔晶石‼　　これはお宝☆の匂い！　　いただいていきましょうよ♡」フィルが上機嫌に飛びついていった。
「いや、危ない！　　魔力探知した方が……」しかし、時すでに遅し、フィルはトラップを踏み抜け、辺りに毒ガスが蔓延した。
「みんな口を塞いで！　　早く逃げるわよ」ルミナスが指示を出す。ルミナスはテレポーテーションを唱えようとしたが、魔法が使いにくくなっていた。沈黙ガスなんだろう、これはヤバい。

　すると向こうから、オークやワイトの大群がこちらに迫ってきた。これもヤバい。
「ギリメカラ！　　こいつらを喰い破って！」私はギリメカラに命令した。ギリメカラは敵の大群に向かって突進する。
「眠れる木々よ、目を醒ましなさい！！」フィルは植物を爆殖させ、オークたちの動きを封じる。が、ワイトたちが火炎魔法を放ち、木々を焼き払う。自由になったオークたちはこちらに突っ込んでくる。しかし、ギリメカラの牙がオークたちを襲い、凍らせる。ギリメカラはオークたちの攻撃を受けながら、こん棒や、鉈で傷つけられても自己再生により、構うことなくオークたちを食らう。
　俺は詠唱を完了させ、魔法を放つ。俺は沈黙耐性があるので、普通の沈黙魔法は通用しない。とりあえず、ルミナスの沈黙を治さないとな！
「キュア・サイレンス！！」俺は沈黙を回復する治癒魔法を放った。あんまり使ったことのない技だが、奪っておいてよかった技だ。
　ルミナスの沈黙は治り、スペルを思い出した。「ありがとう」とルミナスは言い、詠唱を開始した。
　ワイトどもには……、「魔を滅する剣エグゼディスパー！！」ルクスの手から青白い両刃の剣が姿を現した。「この剣はなぁ、勇気に呼応する剣エグゼディスパー、アステナが使ってた剣だ！」
　エグゼディスパーは使い手を選び、今俺の手に渡った。本当に聖なる者で勇気のある者の手にしか持てないという。この剣はアステナから俺に渡った。ありがたく使うことにしよう。
「エグゼパラギラス！！」俺はエグゼディスパーを乱暴に振り回し、聖なる光の刃を飛ばした。これはワイトどもに命中して彼らは死滅した。オークの残党たちもすべてエグゼパラギラスの餌食になり、魔晶石が辺り一面に落ちた。
「ふぅ、どんなもんだい」すごいすごいすごい！！　　ルクスかっこいい☆♡
「かっこいいルクス♡　私のダーリン……」私はルクスをぽーっと見つめ、うっとりした。
「ごほん、私はいいとこなかったわね」ルミナスが残念そうにしている。ううん、みんな頑張ったよ♡
「やっぱりあのトラップは魔族でしょうね☆」
　魔族：魔界より生まれし人間まがいの者。人間界で悪いことばっかりして魔界に落ちて魔族になるものもいる。彼らはゲートを通じて人間界に来たりする。
「ご名答。このくずども！！」あ、噂をすれば影！　　魔族だw

１４．破壊機兵ディサイプス

「ザイアース、お前、人間に寝返ったのか？　ほんとに最低なやつだなぁ、俺たちの血の盟約を忘れたのか？」魔族の男とサキュバスらしぃモンスターの二人組が出てきた。
「ああ、忘れたさ、人間に復讐する気はない。もう俺は仕えるべき人を見つけ……」
「ああ、その女か、これはいい女……」
　ヒュン！ と光の刃が飛ぶ。ルクスの目は真っ赤に燃えていて、相手を殺す気でいっぱいだった。
「魔族は話が通じねぇからなぁ！　殺す気でいくぞ！」
「俺も強くなったんだよぉぉ。イービルバーサク！！」バリバリバリ！ と男の筋肉は隆起し、身体能力が上がった。多分、魔力を大幅に消費して一時的に体力を爆発的に増やす魔法。そんなものでどうにかなるのか？
　男は加速して、視界から消えた。と、思ったら、背後から俺の頭を殴ろうとしやがった。俺は間一髪刀で受け止めるが、相手のこぶしは固く受けただけでは切れなかった。
「眠れる木々よ、目を……」がふっ、フィルは腹部を殴られ、膝をつく、が、そのまま木々を呼び出し、切り返しを狙う、しかし――
　ドス！ と男はフィルを蹴り上げる。ギリメカラが食らいに行くが、なかなか狙い通りに行かない。
　俺は精神統一して、相手の居場所を探る。目ではなく心で、相手の居場所を。
　サキュバスらしぃ女は魔術を詠唱し「テンプテーション！！」と言った。サキュバスは色仕掛けでルクスを誘う。ちょっとふざけないで！
　私は頭に来て、メルティカを引っ込め、ライアスを召喚した。ライアスの怒りの雷がサキュバスを襲う。感情が高まってるため出力が上がっている。
　俺はサキュバスの色気でちょっとムラっと来て集中力が削がれるが、気力で意識を保ち、足の筋肉に魔力を込め、増強する。やつはさらに加速し、今度はルミナスを――
　私はちょっと怖くなりどうしようと想った。私は召喚獣に助けられることしかできない。ルクスも対応がしにくい今、私にできることは――
　ここで私は召喚の詔を思いつき、唱えてみることにした。ここでこの場を切り抜ける子が出てきたら……
「蹂躙せし古の破壊機兵ディサイプス、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」
　大きな魔法陣が地面に浮かび上がり、そこからかつて地上を恐怖に陥れた破壊兵が姿を現した。
「おお、これは量産型ディサイプス、俺も使ってたぞ」
「え、ルクス、知ってるの？」
「ああ、これはかつて魔王軍の主力兵器だったぞ」へぇ～、そうなのか！

私はディサイプスの動かし方が分かるので、命令を出してみることにした。
「ディサイプス、魔力探知、ロックオン、ガトリング！！！」
「ピー、ガ――、ガトリングソウシャシマス」
ズダダダダダ！！！ と両手がガトリングになり、魔族の男とサキュバスを襲う。魔族の男とサキュバスはハチの巣になったが、自己再生により、回復し、術者のエストリアを狙ってきた。
俺はエグゼディスパーを構え、エグゼパラギラスを放った。弱っているサキュバスと魔族の男には効くらしく、彼らは虚空に消え、大きな魔晶石が落ちてきた。
「俺も死んだら魔晶石になるのかな？」俺は素朴な疑問を口にした。
「きっとめっちゃおっきくて輝いてるんだよ。でももう人間と同じで出ないかもしれないね」
確かにエグゼディスパーも持ってるし、もう聖なる人なんだね、ルクス君は！　大好きだよ♡
「ルミナス、フィル、大丈夫？？」私は慌てて駆け付けた。怪我の容態はひどく二人はかなりのダメージを負っていた。私は白魔法のヒールを二人にかけ、傷の手当てをした。聖なる光が淡く彼女たちを包む。二人は気力を取り戻し、立ち上がった。

１５．ルクス君と買い物

「ありがとう、エストリア、あの魔族強かったわね」ルミナスが立ち上がり、先ほどの戦いを振り返った。うんうんヤバかった。運が味方してくれないとやられてたかも。
「ありがとう、エストリア、うぅ...」フィルが先ほどの蹴りを想像したのか、身震いした。可哀そうに、トラウマになってなきゃいいけど。
「ギリメカラもライアスもよくやってくれました、可愛いね〜、わしゃわしゃ〜♡　それとディサイプス！　初めまして、召喚士のエストリアです、これからあなたの主人になります、私と一緒にいつまでも冒険しましょう♡　よろしくね♪」
「ピー、ガ――、ショウチシマシタ、スエナガクヨロシク」
「何その子、強そうね！」フィルがしげしげと覗き込む。
「ええ、古代兵器なの、500 年以上前の戦いに使われたんだって。魔王軍の主力兵器だったんだけど、みんなアステナさんに滅ぼされちゃったのね。アステナさん死なないで欲しかったなぁ」
「俺は殺されちゃったけどな↓」ルクスが悲しそうにしてる、そういうときは.....
「ルクスは地上で最も聖なる者なんだから自覚しなさい！　ルクスは私だ・け・の・使い魔なんだからもうちょっと背筋をシャンと！」
「ありがとう、エストリア」
　私たちは辺りに散らばった魔晶石とあの罠の大きな魔晶石を回収して、もうやることはないなと見届けて、
「じゃぁ、そろそろ帰りましょうか。テレポーテーション！！」
　ルミナスが私が使えない転移魔法を放った！　私もいつかテレポーテーション覚えてやるんだから〜〜〜！ ☆

　今日はルクス君とスーパーに行くことにした。ルクス君もこういうところに来たことがないでしょ♡
「破壊したことはあるけど、あんまり利用しないな。涼しくていいとこだな」ルクス君が感想を述べた。こんなとこ一緒に買い物してなんか夫婦みたい、ヤバいキュンて来ちゃう!!
「私はルクスと買い物に来れて嬉しぃですよ♡　今日のお夕飯は何にしましょうか？」
「ステーキなんていいんじゃないか？　今日お金いっぱいもらったし」そう、私たちはあの大きな魔晶石を換金してたくさんのお金を得たのだ！　多少贅沢しても怒られないはず。
「では今日はステーキにいたしましょう！　それとほうれん草とパンとヨーグルトと、見てこれ、チョコパイだって。おいしそうねぇ〜、買ってく？」

「いいんじゃないかな。買っていこう」うんうん、チョコパイは買いで。
「あとはカフェオレを買っていこう。俺も紅茶派じゃなくてコーヒー派になった。」うんうん、カフェオレも買いで♡
　レジを済ませ、「いっぱい買ったね、ルクス君、デートしちゃったね♡」私はルクスに言った。
「エストリアが嬉しいんじゃなんでもいいよ」ルクスは照れくさそうに笑った。

１６．みんなでお夕飯

　私たちはお家に帰り、お夕飯を作ることにした。まずはほうれん草のバター炒めから作ろう。
　フライパンを熱し、ほうれん草をバターだけで炒める。素朴な味わいでとてもおいしい。
「ルクスはパンを焼いてみて！　　できる？」私は分からないのでとりあえず聞いてみた。
「やり方が分からない、どれでやるんだ」可愛いルクスはいろいろと戸惑っていた。うんうん、分からないことってあるよね♪
「この全自動パン焼き機で焼けばいいんだよ。魔晶石の魔力で熱を微量に起こし、焼きあがるころ、自動的に切れるんだよ、ここをポチって押すの♡」
「うん、分かった」ルクスにも人間の営みを教えないとね。ルクス君は私だけの使い魔なんだから♡
「よし！　　ほうれん草できたよ♡　あとはサーロインステーキを焼こう♪　フライパンにバターを熱して、切ったニンニクを入れて、お肉を投入、片面１分半、裏返して１分半焼きましょう♪　これでだいたいミディアムレアだね♪　はい、完成☆　じゃあ、食べよっかルクス君♪♡」
　私たちは食卓に着いた。焼いたパンにほうれん草にサーロインステーキ、ヨーグルト、カフェオレ、うんこれは贅沢な夕食だよぉ！ ♡
「じゃあ、いただきます、しよっか♡　いただきます♡」
「いただきます」
　召喚獣たちにも同じご飯を与える。召喚士としてこの子たちの幸せは守らないといけない。召喚獣たちはエストリアが作ったご飯を一心不乱に喰らいつく。お腹がすいていたのだろう。
「ギリメカラも戦闘頑張ったね。ライアスの雷もすごかったよ、メルティカも私を守ってくれてありがとう♡」
　ルクス君はサーロインステーキを食べていた。とてもおいしそうに食べていた。
「こんなにちゃんとした料理が食べれて嬉しぃよ。魔界の食事なんて肉を焼いて脂肪がどれだけあるかだけが判断基準の料理ばっかりで……」それは可哀そうに。私がいつでも作ってあげますからね♡
「ああ、おいしかった……」ルクスが満足そうにしていた。うんうん、私も作った甲斐がありましたよ♡
　私は庭に行き、召喚獣ディサイプスを呼び出すことにした。
「蹂躙せし古の破壊機兵ディサイプス、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

　魔法陣が地面に浮かび上がり、そこから破壊機兵ディサイプスが姿を現した。私はすぐさまディサイプスに抱きつき、魔力の供給を行った。ディサイプスはこうやって魔力を供給して動くとルクスから聞いているので。
「ディサイプス、今日はかっこよかったよ。私を守ってくれてありがとうね♡」
「コチラコソアリガトウ、テキヲセンメツシマス」ほんとにいい子ねぇ〜、ありがとう！
　私は神様に祈った。こんなに素敵な召喚獣たちをくれてありがとうと。私の祈りは天に届いたみたいだ……。

１７．３日目の夜

さあ、私の部屋でみんなで寝るぞ！　私は今日はどんなことが起きるのかと胸をわくわくさせた。

するとメルティカがネグリジェの私を襲って、口に体液を入れ、体中をまさぐり始めた。胸も揉みほぐされ、私は召喚獣の愛撫に感じていた。

ルクスは諦めたようにベッドに座っている。ちょ、え、助けないの‼

メルティカは私のおっぱいを吸ったり揉んだりして私を気持ちよくしている。ヤバい、１８禁になっちゃうヤバい！ ☆

ついに私の秘部に到達して、ぱんつの上から私をまさぐり気持ちよくさせた。私は召喚獣に体中いじられて感じ、頭がおかしくなった。

「あ、や、ふぁ、あ、気持ちいい、誰か、助けてぇ、あ！」私はメルティカの愛撫に酔いしれ、気持ちよくなった。それから１０分くらいメルティカに愛撫されていた。

ルクスもしたくなったのか、メルティカを説得してルクスの番になった。ルクスは私の口にキスをして舌を入れてきた。ルクスは味わうように舌をかき回し、私の口の中を丁寧に洗った、ヤバい、感じちゃう！

私もルクス君の舌を愛し、貪りあった。ルクスに犯されながら、私はおっきなあそこに責められ、ルクスのことしか考えられなかった。

１８．日曜礼拝へGO！！

朝起きて、私は今日は日曜日なので、教会に日曜礼拝に行くことにした。グレーシア福音教会の教会員はすごい数で、200人ほどの聖徒が主に礼拝を捧げるために出席する。私は洗礼をもう受けていて、聖書も全巻読んだクリスチャンなのだ！　私はダンジョンも攻略して主のために人のために働いてる教会員で誇らしいと想うけど、みんないろいろと賜物があるのだ。私は聖霊によって、召喚獣を操ってるし、それはそれでいいかな。
「お、おう、教会に行くのか」ルクスがちょっと困惑してこちらを見ていた。私は優しい口調でルクスに語り掛ける。
「うん、ルクスも行くんだよ。私のダーリンとしてみんなに紹介しなくちゃ！」私はルクスへの服を選び、
「うん、これなんて控えめでいいんじゃないかな。ルクスにもぴったりだよ」私は水色のYシャツをルクスに手渡した。ルクスは嬉しそうにそれを手に取った。

グレーシア福音家庭教会に着いた。ルミナスがもう出席していた。
「おはよう、ルミナス、今日は主日だね」
「うん、昨日ヨシュア記を読んでイスラエルがアイの戦いで異邦人に負けてた。その理由はアカンが.....」
「ああ、アカンね、戦利品を取っておいた人！　戦利品は焼き払わなくちゃいけなかったのにね。そして主が激怒して、だーれが戦利品取ったんじゃいってくじで調べて、ユダ部族、何とか支族って来て、アカンがついにこりゃアカン！ ってなったやつね。確かにアカンも可愛そうだけど（ みんなに石で殺されちゃった ）こりゃアカンと想うよ♡」
「そうよね、こりゃアカンw」
そうしているとフィルが来た。フィルも私たちの隣に座った。フィルは聖歌隊に入っているらしい。きれいな歌声してるんだろうなぁ！
そして日曜学校が始まった。日曜学校とは子どもたちに福音の素晴らしさを楽しく教える子ども向けの学校だ。今日はザアカイの話をするらしい。
「昔々、あるところにザアカイという欲が深い取税人がいました。その人はみんなから税金を多く取り立て、みんなから嫌われていました。ところが、ザアカイはイエス様が来たと分かれば、すぐにイエス様を見ようと家を出ました。ところが！　イエス様は聴衆がいっっぱいいて見れませんでした。そのため、ザアカイは木の上に登って、イエス様を少しでも見ようとしたんですよ。ザアカイは背が低かったんです。するとイエス様はザアカイを見つけ、「ザアカイ、今日はあなたの家に泊まるところです」と言いましたよ♡　これはグッドニュースですねぇ。そしてイエス様は罪人のザアカイのもとに来ました。ザアカイは嬉しくこう言いました。「イエス様ありがとうございます。私は人から多

く税を取っていました。今、私は税を多くもらった人にその 4 倍を返します。本当に悪いことをしました、ごめんなさい」ザアカイは御国の子でした。このようにして失われた人を救うことって尊いですね、おしまい！」

　こうして日曜学校が終わった。そして礼拝が始まることになった。

１９．日曜礼拝へGO！！　２

　私たちの主日礼拝が始まった。最初に司会が挨拶して、賛美を歌うことになった。賛美は聖歌の主が私の手をだった。伴奏者がオルガンをきれいに弾いてみんなで賛美を歌った。
「主が　私の手を　取ってくださいます
どうして怖がったり逃げたりするでしょう

優しい主の手にすべてを任せて
旅ができるとは何たる恵みでしょう♪」私は１番から４番まで高らかに歌った。すごいすがすがしい気分だった。
　そして着席して、グレーシア福音教会牧師のリディアルが今日の説教を語るそうだ。リディアル牧師も霊の賜物がいっぱいあって素敵な牧師だ。なんでも手を置くとみんな自然と癒されるそうだ。
「はぁ〜い、リディアルちゃんに注目☆　今日はヨハネの福音書から素敵な言葉をプレゼントするね。私はあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。とあるね☆　新しい戒め、旧約聖書における厳しい裁きのいろいろな律法はほとんど廃棄されました。もっともイエス様も大切にしてる律法もあるので、すべて廃棄したわけじゃないけど、いけにえとか安息日とか割礼（ 男子の包皮を切り取る ）などの律法はすべて廃棄されましたね。新しい契約としての新しい戒め。それはただ一つ、他の誰かを愛することです。イエス様はこの前の箇所でペトロたちの足を洗っていましたね。そのように足を洗いあうようなそういう信仰が必要になってくるわけです。ただ自分によくしてくれる人を愛するのもいいですけど、自分を粗末に扱ってくる人たちにも一応愛の気持ちが必要になってくるのかもしれません。もっとも魔族は人ではないかもしれないけど、愛の心で接する愛も必要かもしれません。ほら、見なさい。エストリアが新しい兄弟を連れてきました。元魔族のルクス君です、みんな拍手！！！」
　パチパチパチパチっと歓声が上がった。ヤバい、私だ！　　やった！　　どう、私のルクス君、かっこいいでしょう♡♡
「ルクス君、みんなにご挨拶できる？」「はい！」ルクス君は緊張しながらもたどたどしく話を始めた。
「えっと、エストリアの使い魔のルクスです。以前はザイアースという名前で魔王の眷属をやっていましたが、エストリアのおかげで、人の心が持てるようになりました。召喚された時から、エストリアが好きで、彼女を守るために必死に戦いました。エストリアの愛が僕を正気に戻させたんです、エストリアは僕の天使です☆」

パチパチパチっと歓声が上がった。
「はい、このように、魔族にも愛が伝わるそうで……、これは例外的なことかもしれないけど、ほんとにすごい成果でした。人は聖書を読まなくても何が愛かは分かるようにできてるので、愛に忠実に生きてください、リディアルからでした☆彡」

　礼拝が終わって……兄弟の一人が話しかけてきた。
「二人はどこまでいったんですか？」え、えへへ、内緒だよー☆彡

２０．１４層フロアボス

それから私たちはまたダンジョンに潜り、モンスターをたくさん倒していた。落とし穴とか隠し通路とかダンジョンは仕掛けがいっぱいで気が抜けなかった。そしてまた帰り、ルクスと召喚獣とイチャイチャして時間を過ごすことにしていた。

私は常時、ギリメカラとメルティカを召喚してダンジョンを歩いた。私は精神力的に召喚獣を２体操って戦闘するのが限界なので、２体だけ召喚して、戦いに備えた。

フィルが歩いたところからは木々が生えていき、ダンジョンが少し自然っぽくなっていた。フィルは自然が好きなので、戻そうともせず、そのまま歩いた。

魔族の人とも戦ったし、倒したりもした。ルクス以外は愛せないので、叩きのめすことにしている。そうするしか私たちの生き残る道はないから。

地下迷宮はもうここにしかなく、魔族の人たちの凋落がうかがえた。ここのゲートだけ塞げば、つかの間の平安が見いだせる。私たちはそれを頼りにダンジョンの中を進んだ。「しかし弱ぇモンスターしか出てこねぇな、モンスター増産班は何やってんだ」ルクスが魔王のようなことを言っている。ルクスはまた上半身裸になって戦闘態勢になっていた。その名残だろう。

私はルクスの手を繋いで歩きたくなった。でも今はやめとこう。いつ襲撃が来るか分からない。私たちは先へ進んだ――

すると広い空間が現れ、レッサーデーモンたちを従えた、ローブを身にまとったウィザードが２人.....十中八九魔族の男が下に続く階段を守っていた。

「よぉ、ザイアース、お前人間側に寝返ったってなぁ。なんだその女は、結構いい女.....」

ヒュンッ！ とエグゼパラギラスが飛ぶ。魔族の男たちは横なぎに飛び、かわした。魔族とは会話は成立しない。力づくでねじ伏せるのみ！

魔族の男は血を剣にして戦いを挑んできた。もう一人は召喚術によって黒龍を呼び出し、その背に乗った。

「ギリメカラ、そいつを喰い破って！」私はギリメカラに魔族を喰いちぎるように命令した。ギリメカラは加速して剣の男に喰らいつこうとする。男の剣は伸び、それを一薙ぎすることで自由自在に形が変えられた。血の剣で一閃、ギリメカラは斬りつけられ、体制がよろけた。そして精神干渉により恐怖が彼の中に芽生えてしまった。

木々はレッサーデーモンを襲うがテレポートされ、レッサーデーモンはマジックカースと爆炎魔法を放ってきた。俺は魔法反射により、エストリアと俺を守ったが、ルミナスとフィルは守り切れなかった。ものすごい爆発が起き、フィルは吹き飛ばされ、ルミナスもダメージを負ってしまった、かつ、マジックカースにより、魔力が弱まってしまった。

フィルの木々はフロア一帯に達し、どこからでも魔族たちを攻撃できるようになった。レッサーデーモンに木の毒槍を貫かせ、血の剣の男も槍に襲われるが、彼は体が血にな

るようで、ダメージを余り受けないが、毒を食らったらしい、少しずつダメージが与えれるはずだ。

黒龍はものすごい火炎を辺り一帯に放射してきた。エストリアが危ない！　俺はテレポートして、エストリアをかばった。エストリアをお姫様抱っこしてまたテレポート。しばらくはこれで戦うのもいいかも。私はかばわれながら、（ ヤバい！　ルクスにお姫様抱っこされてる！　めっちゃ絵になる/// ）と戦闘には関係ないことで心が高揚していた。私は体を預けた。

ルミナスの詠唱が完了した。「ルナティックフルムーン！！」赤い満月が浮かび上がり、これを見た者は気が狂ってしまう。黒龍は見てしまい、気が狂い、苦しそうに倒れてしまった。そこに木々の槍が迫り、黒龍をズタズタに貫いた。黒龍の息の根は絶え、大きな魔晶石が転がった。

ギリメカラは血の剣の男と戦っている。何とか間合いに入れれば、ううん、もういい、私はギリメカラを引っ込めた。

「蹂躙せし古の破壊機兵ディサイプス、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」魔法陣が浮かび上がり、そこから、ディサイプスが出てきた。

「ディサイプス、エネルギー充填、プラズマレールガン！！」ディサイプスはプラズマレールガンの用意をした。

俺はエストリアを降ろし、エグゼディスパーを持って戦いに出た。黒龍の男が地面から槍を出現させ、俺を狙ってきた。俺はテレポートしながら避け、エグゼディスパーを振るった。

「エグゼパラギラス！！」黒龍の男目がけて飛び、男は地面から盾を出現させたが、エグゼパラギラスはそれを貫き、黒龍の男に直撃した。黒龍の男は消し飛び、魔晶石が落ちた。

ディサイプスはエネルギーの重点を終え、プラズマレールガンをぶっ放した！　ディサイプスの手から、太いレーザーがすごい勢いで射出され、血の剣の男を貫いた。

ドゴォォオオン！！！ とものすごい爆発が起き、辺りは火に包まれた。全員叩きのめし、スカッとした。

私はルクスに抱きつき、「ありがと♪」と言った。ルクスがいなかったらやられてたよ。私はルクスをぎゅ〜っとして、私の匂いをつけておいた。ルクスは照れくさそうに笑った。

２１．テレポーテーションの秘密

　１４層のフロアボスを倒し、私たちは１５層への階段を降りていった。また熱さが厳しくなり、汗をかいた。そこでルミナスは魔力の痕跡をつけ、また、教会へ向け、帰還することにした。
「テレポーテーション！！」もうこれはルクスに教えてもらおう。テレポーテーションのやり方を！

「ねぇ、ルクス、テレポーテーションってどうやってやるの？」家に帰り、私はルクスにテレポーテーションのやり方を聞いた。どうしても覚えておきたいし、もしかするとできるかもしれない。
「いや、これは呪文を覚えとかなくちゃいけないよ。頭の中でそれを高速で唱えて、テレポーテーション！ って叫ぶんだ。あとは行きたいところを思い描いて.....」
「ふ〜ん、そうなんだ！　呪文って何？」
「うん、呪文はシャクトリイルーレントエスペディアガスクロイデン.....テレポーテーション！！ でいい。高速で唱え、行き先を思い浮かべるんだ。そうすれば、できるはずだ」
「へぇ、ルクスも魔術の心得があるのね。やってみるわ。シャクトリイルーレントエスペディアガスクロイデン.....テレポーテーション！！」
　私はそらで唱えることができた。高速で唱えて、私は町の商店街に飛ばされてしまった。あ、そっか、行き先を思い浮かべなくちゃいけなかったんだ！　しょうがない、何か買ってお家に帰ることにしよう、愛する人のところへ！」
　私はシュークリームを１０個買って家に向かってテレポーテーションした。すると、すぐに私はお家に帰ることができた。
　家に帰ると、私は愛おしいルクス君を見つけ、抱きついた。会えない時間が二人の絆を強くするのね！
「ルクスただいま、シュークリーム買ってきたよ♡　早くみんなで食べましょう♡」私は召喚獣たちにもシュークリームを振舞った。
「うまい菓子だなぁ、エストリアが買ってきたからおいしい」私たちはシュークリームをほおばった。
　私はこんな召喚獣たちに愛されて幸せだった。今日はいい夢が見れそう♡

２２．シャイナータ聖花祭

　次の日、私たちはここ聖都シャイナータでの一番のお祭りであるシャイナータ聖花祭へみんなで行くことにした。今日はギリメカラたちもみんな召喚して、みんなで行くことにした。ルクスもシャツを着てかっこよくキメている。

　シャイナータ聖花祭はイエス様が生まれた日の誕生花がこの白いアイビスだったので、イエス様のお誕生日にこの白いアイビスを贈りあう風習ができたそうだ。この日は男子も女子も告白しあうロマンチックな日で、みんな自分が告白されるんじゃないかってそわそわしてるんじゃないかな？

　まあ、あたしたちはもう夫婦なので、告白しあう必要はもうありませんけど。愛を確かめ合うのが必要なだけで、そういうのじゃありませんけど。

　私たちは出店をいろいろと見てみた。牡蠣のオレンジジュースパスタというのがあり、これを試してみることにした。牡蠣の不思議な味とオレンジジュースの酸味がよくあっている。塩味がついているので、こうしてパスタになっているのだ、これはおいしい。

「ねぇ、ルクス、これおいしいね、今度お家で作ってみようね♪」

「これは俺も食べたことがないな、すごくおいしい」

　創作料理って面白そうよね、今度何か作ってみたいけど♡

「ギリメカラもこれ食べてみて！　ライアスも！　え、メルティカは嫌い？　しょうがないなぁ～」私は召喚獣たちの要望に応え、料理を振舞った。メルティカにはあとで何か買ってあげないと。

「ディサイプスは食べられないからね。破壊機兵のあなたには私の魔力を注いであげるね♡」

　私はディサイプスに魔力を注ぎ込んだ。ディサイプスは嬉しそうにしている。

「はい、あげるよ」町の少年、14 歳くらいがエストリアに向けてアイビスを差し出した。エストリアは困った顔をするも受け取り、エストリアもアイビスを手渡した。

「えへへ、お姉さんと友達になっちゃった」少年は笑うも私は友達になる気はなかったし、困ってしまった。でもこの少年の気持ちは嬉しいし、私はお礼を言うことにした。

「ありがと。君は優しいね。」まあ、こういうイベントも悪くない、あの少年、可愛かったなぁ。

「ルクスにもアイビスあげないとね。しょうがない、ここはブルーアイビスにしましょう！」

「青いのもあるのか」

「そうです！　ちょっとレアで高いけど、私たちの愛を表現するにはこれくらいがいいでしょう。早く、お花屋さんに行きましょう♪」

私たちはお花屋さんに向かった。しかし、どのお花の出店を伺ってもブルーアイビスはなかった。探して探して、やっとあった、ブルーアイビスが、しかし、高いなんだこの値段は！

「3300LYRE！　た、高いけど、払いましょう。私たちの愛を表現するにはこれくらいでなきゃ」

私たちはブルーアイビスの花束を買った。それをルクスに手渡して、私は抱きついた。本当に最高の聖花祭になった。私たちはみんな幸せだった。

帰りにメルティカにご飯を買ったが、メルティカは私とイチャイチャしたいらしくメルティカに弄ばれ、私は召喚獣にときめいてしまった。



BCO.aed19e12-a245-4d4d-b2b7-dd2e79072896.png

２３．花火を２人で

私たちは一旦家に帰り、ブルーアイビスを活けた。私たちを祝福してるようにきれいに咲いている。私はほころばしくもルクスの手を取り、花火を見に行くことにした。シャイナータ聖花祭は〆に壮大な花火が打ちあがるのだ。

今回の花火には召喚獣たちは連れて行かないことにした。たまにはルクスと二人っきりで愛を育みたいから！　私は甘々な妄想をしながら、花火を見に行くことにした。

「花火を見るのに、絶景なポイントがあるのよね！」私たちは歩いていき、誰もいない丘の上に着いた。ここは町から離れているが誰もいないので、静かに見るにはとてもよかった。

「まーだかな？　まーだかな？？」私たちは花火を待った。ロマンチックで壮大な花火が打ちあがって欲しいなぁ。待つこと１５分.....

ヒュ〜〜、ドーン！！ ドーン！　あ、花火が上がった！　きれいねぇ、ルクス！

「エストリアと見てるからきれいなんだよ」え、私と見てるから？？

「そうですか、私と見てるからきれいなんですか！　ルクスは私が好きなんですねぇ、私もあなたがいるからきれいなんですよ」私もルクスがいるからきれいなんだと想うようになってきた。何これ、魔法？

「エストリア...」ルクスが私の顔に手を寄せてきた。私はされるがまま、「ルクス...」と言って、身をゆだねた。

花火が上がったまま、私たちはキスをして、お互いを貪りあった。誰もいない丘の上で花火が上がりながらキスってめっちゃロマンチック！

ルクスは私の口の中を味わい一生懸命キスしている、私も負けないようにルクスの舌を絡ませながらキスをした。

ヤバい、恋に溺れちゃう、ヤバい、しかし私はルクスとラブロマンスすることが好きすぎてルクスにメス堕ちしてしまった。

ルクス君.....♡　私は目がハートになってとろけてしまった。私はルクス君のものです、永遠に♡

２４．シャイナータの危機

家に帰ってから私はルクスにめちゃくちゃに犯された。気持ちよくて私は嬉しくて何度も達してしまった。歓びに浸りながら、眠りにつき、私は一つの夢を見た。

川が流れていました。そのボートで私は川の流れの反対の方にボートを漕いでいきました。するとルクスがいました。乗り込んでもらい私たちは川を下りました。川を下っていくと、ラベンダー色の海に出ました。二人を祝福する夢の海に二人で飛び込みイルカとたわむれていました。

ドゴォォォンとどこかで爆発が起こりました。何事かと飛び起きると町に火の手が上がっています。今は早朝です、これは町を守護する結界が破れてしまったんでしょうか？

町の城壁には魔法衛士隊がいるはずです、魔族なら討伐してくれるはずです、何があったのでしょう。

「ルクス、行くわよ、教会の討伐隊としてここは行かないといけないわ！　何としてもこの騒ぎを食い止めななくちゃ！」

「おう、行こう」

私は騒ぎが起きているところへ意識を傾け、呪文を詠唱しテレポーテーションした。ルクスも同じようにテレポーテーションした。

すると、魔法衛士隊が魔族と戦っていた。さっきまで魔族は家を壊し、女の人を襲おうとしていたようで、魔法衛士隊がそれを助けた。

とにかく食い止めないとこの町が蹂躙されてしまう、それだけは防がないと。

魔族の男は目視するだけで 10 人はいた。他の場所にもいっぱいいることであろう、これはまずい。

私はあらん限りの力で、ギリメカラ、ライアス、メルティカ、ディサイプスの召喚獣を呼び寄せた。ここは総力戦、食い止めないと。

ギリメカラは突進して魔族の男を喰い破ろうとするが魔法で跳ね返されてしまう、ギリメカラの氷のレーザーが魔族と辺りを凍らせる、ギリメカラ、あんたそんな技使えたの？？

魔弾使いの魔族が弾丸をこちら目がけて飛ばしてくる。こちらに飛んできたが、間一髪ルクスの剣がそれを跳ね返した。

ルクスは怒り、エグゼディスパーを乱暴に振り回し、そこら中にエグゼパラギラスを放った。魔族の一人がそれを食らい、虚空に消滅した。

ディサイプスはずっとガトリングを撃ち、魔族の男たちを殺している。が、自己再生して、ディサイプスに毒の槍を突き立てて来た。ディサイプスの装甲を少し穿ちディサイプスは苦しそうだった。ディサイプスは火炎放射をして魔族を焼き払おうとするが、魔槍使いはそれをかわし、ディサイプスを仕留めに来る。そこに狙いすませた電撃を食らわせ、魔族の男一人を葬った。

魔弾使いはしきりにルクスとエストリアを狙う。そこに他の魔族が詠唱を完了させ、二人を金縛り状態にした。俺は剣気で防いだがエストリアはダメだった。エストリアはメルティカの防御があったが、魔弾使いが魔弾を連射して、貫通していまい、エストリアは魔弾を食らい、地面に倒れた。

エストリアは苦しそうに呻いている。が、立ち上がり、力を使った。立ち上がり、魔力を振り絞ればまだ戦える。魔族が一人もいなくなるまで戦わなくちゃ。

肩からはかなりの出血があり、もう持たないだろう、だがエストリアは気力を振り絞り立ち上がって魔力を使った。その魔力に反応してルクスに最強聖魔法の詠唱が流れ込んでくるようになった。

これは長い詠唱だ、テレポーテーションの比ではない、ルクスはエグゼパラギラスを振るいながら、詠唱を続けた。

するとルミナスとフィルがこちらに向かってくるのを感じた。

「眠れる木々よ、目を醒ましなさい！」フィルの魔法により、木々が辺り一帯に広がった。

「木々の癒し！」フィルの魔法により、エストリアは体力を回復した。

木々は魔弾の男に追いつき絡みついた。「ディサイプス、ロケットランチャー！！」

ディサイプスは腕からロケットランチャーを発射させた。ドゴォォォンという轟音と爆炎を燃え立たせ、魔弾の男を葬った。

まだ、魔族、魔物たちはかなりの数がいる。増えているんじゃないか。

ルミナスは詠唱を完了させ、「フルムーンショット！」白い満月を浮かび上がらせた。白い満月は魔族たちを目がけて光線を放っていく。魔物たちは満月の光に浄化され、虚空に消えていった。

瘴気をはらんだ風の刃が辺りに飛び交う。このままではやられてしまうかもしれない。ここで、ルクスの魔法は詠唱を完了させ、最強聖魔法を放つ時が来た。

「サントアレグレッシェンド！！！」光の大爆発が起き、辺り一帯が光に包まれた。それは町を包み、魔族たちはその罪悪の量で裁かれた。こうして聖都シャイナータの結界崩壊事件は終わった。

２５．エストリアと王女エステト

エストリアが倒れてしまった。俺は急いでヒールをかけたが、すまなかった。非常時とはいえ、こうする必要はなかった。ヒールだけではダメで、何らかの呪いを受けてしまったんだろう。解呪するにはどうしたらいいんだろう。

衛生兵が急いでエストリアを運ぶ。弾丸が肩に埋まっているかもしれない、俺はあとをついていった。

シャイナータ結界崩壊事件の顛末はシャイナータの結界を張っている王女エステトの病気が進行してしまったからしい。悪性の腫瘍ができているとか。これも呪いかもしれない、解呪をしないと。

エストリアは上着を脱がせられ、肩の傷口を調べられていた。弾丸は貫通して外に出ていたが、呪いにより、生命力を急速に抜き取られてしまう。ひどい呪いで解呪の方法がなかった。

俺はエグゼディスパーを出し、切っ先から聖なる光をエストリアの肩に注いだ。するとエストリアの顔色がよくなり、呪いの力が少し弱くなっていっているようだ。

エストリアは安らいだ顔で安心している。あとは傷口をふさいで安静にしていればいいか。

問題はお姫様だな、俺は王女殿下に会いに行くことにした。

お城に着くと、エストリアの呪いを解いたとして通してくれた。謁見の間に行くと、王女エステトが苦しそうに息を荒くして座っていた。

「よく来てくれました。私はエステト。この国を守護する一番の魔法使いです。普段は結界を張ることに私の時間の大部分を使い、強力な結界を張っています。魔族どもに襲われないためには城壁だけではいけません。しかし、魔界の魔族どもが私を呪い病気にさせてしまいました」

「分かりました。その病気治せるかもしれません」俺はエグゼディスパーの切っ先で悪性の腫瘍のあるところに光を注いだ。すると呪いは解け、悪性の腫瘍は治った。

「なんという剣でしょう！　これは聖剣ですね！　聖剣エグゼディスパーですね！！」

王女殿下はすごく喜び、ルクスに深々とお礼を言った。「これは国の白魔導士でも敵わない、１級のヒーラーです！」王女は深く喜んだ。

２６．地底湖のボス

退院したエストリアの容態はよかったが、事は急を要するので、ダンジョンに向かうことになった。ルミナスとフィルも一緒に来てくれた。私たちはいろいろあったが、結構ベストパートナーなんじゃないかなと思っている。

ダンジョン 15 層を歩いていくと、広い地底湖が横たわっていた。わ〜、広〜い☆　ふっしぎ〜☆　向こう岸に行くには泳いでいかないといけないのかな？

私たちは地底湖に近づいていくと水龍が姿を現した。水龍は大波を起こし、私たちを溺れさせる作戦に出た。

私はギリメカラを波に飛び込ませた。彼の氷の牙が波を水龍ごと凍らせる。ピキピキピキッと水龍は凍りついたが、氷を割き、水龍は暴れ出した。ギリメカラは吹き飛ばされ、逃げ遅れた私とフィルも濁流に飲まれた。

ルミナスの詠唱が完了して満月が空から落ち、水龍を叩き潰す、ルクスのエグゼパラギラスも水龍を襲うが、水龍はもう一つ頭があり、また、大波を放ってきた。

私たちを波が襲うが、私はディサイプスを呼び出し、プラズマレールガンの充填をさせた。

俺はエグゼディスパーを思いっきり、振るい、波を穿った。波は左右に割け、地底湖の底があらわになった。そこにディサイプスのプラズマレールガンがエネルギーを滾らせ発射された。

ドゴォォォンと地底湖にものすごい爆発が上がる。水龍は死に絶え、大きな魔晶石が転がった。

「やった、やったわ！　ねぇ、見た、ルクス、まるでモーセでしょ、かっこいいわぁ！」私は感心してダーリンを見た。まるで第二のモーセでこれはかっこよかった。

「ルクス君、かっこいいですぅぅぅ♡♡」フィルが感心してルクスに熱い視線を送っている。ちょっとフィル、そういうのはダメですからね.....〆

２７．ゲートキーパー

私たちは何日もダンジョン15層を探索し、幾度も罠をくぐり抜け、ついにゲートを見つけた。

禍々しい、瘴気を含んだ縦長のゲートが空間を裂いている。そこから魔族の男2人がこちらに来た。序列2位のデザスターと序列3位のデルビアントであった。

デザスターは姿が見えなくなり、デルビアントは黒い雷を放ってきた。

危ない！　私はメルティカの中にいて助かったが、ルミナスとフィルが雷を食らってしまった。

ルクスはテレポーテーションで避け、デビルアントにエグゼディスパーの斬撃を食らわせる。しかし、デルビアントは分裂して、斬撃を避け、デルビアントは2体になった。

デザスターは見えないところから、漆黒の刃を振るい、ルクスを切り刻もうとしてきた。ルクスは飛びのけて回避するが、デザスターの斬撃を食らってしまった。呪い込みの斬撃でルクスは魔力を吸い取られていってしまった。

そこにデルビアントの電撃がルクスを襲い、ルクスはボロボロになってしまった。

やめて！　私はライアス、ディサイプスを召喚させ、反撃体制をした。すると召喚の詔を思いつき唱えてみることにした。

「空より高い天より来る神の従者ミスティエル、私のもとへ馳せ参じたまえ！！」

光の魔法陣が出現し、そこからきれいな羽の生えた少女が姿を現した。

「私を呼び出せるなんて高位の召喚術士ね。分かりました。神の敵、殲滅します」天使は短く詠唱し、光の盾を私たちの周りに張った。これはどんなまがまがしい力さえもはねのけるそうだ。

デルビアントが黒い雷をそこら中に落とすが、この盾を貫通することはなかった。怒ったデザスターもミスティエルを殲滅しに来るが、ミスティエルは短く詠唱し、光の刃を辺り一帯になびかせ、デザスターを斬りつける。

俺は最後の力を振り絞り、エグゼディスパーを振るい、デザスターを討った。デルビアントはどんどん分裂するが、エグゼディスパーの刃で斬りつけられ、虚空に消滅した。

まったく、ルクスは、無茶するんだから。ルクスはその場に倒れたが、ミスティエルの治癒魔法でまた気力を取り戻した。何この天使、万能！

あとはゲートを塞ぐだけ、私はゲートを塞ぐ方法が分からず、思案した。

ミスティエルはもう魔界は要らないと言った。こんな信仰深い人たちは救わなくてはならないと言った。

ミスティエルは長い長い詠唱をして、最後に「サントアレグレッシェンド！！！」と唱えた。

魔界で大爆発が起き、魔界は粉々に砕け散った。そして、地上の悪い人たちも根こそぎ死に絶え、平和が辺りを包んだ。

エピローグ

　地上は楽園になった。悪い人は死に絶え、平和で朗らかな人しかいなくなった。犯罪はなくなり、争いもなくなり、私たちは幸せに暮らしていた。

　ルクスの肌の色もすっかり白くなり、私たちと同じになった。ルクスは終始、機嫌がよさそうで、楽しそうにしていた。

　それから私たちはまだ、式を挙げてないと気づき、結婚式を開くことにした。

　パパとママも今日のために来てくれた。フィルとルミナス、教会の兄弟、近所の人たちもみんな来て、私たちを祝福した。私は嬉しくて泣いてしまうところだった。

　結婚式では牧師のリディアルが式を執り行うことになった。牧師は言った。

「初めに人間は男が生まれました。でも一人でいるのでは寂しいからと女が彼のあばら骨から作られましたね。夫婦は一体となり、一つとなるのです」

「夫ルクス、あなたは悩めるときも貧しいときも妻エストリアを愛すると誓いますか？」

「はい、誓います」

「妻エストリア、あなたは夫をどんな時でも支え、愛すると誓いますか？」

「え、あ、はい、誓います♡」

「では、お互い、誓いのキスを」

　え、え、どうしようかな？　しちゃおっかな？　恥ずかしいな、みんなの前で、でも、いいや、ルクスは私のもの！　私だけのルクス君なんだから〜！！！

　私とルクスは顔を近づけ、唇を重ねた。ぷはっ。これで私たちは夫婦。公然と夫婦として歩いていけるのよ！！

「ルクスは魔族を破った立役者ですからね、いい夫を持ちましたね、エストリア」リディアル牧師から言われて私は嬉しくなった。ミスティエルも嬉しそうに笑っていた。

　ほんとにどんなに悪い人でも悔い改めることができるのね、私はそのことを胸に刻んで幸せをかみしめるのだった。

END



BCO.a86c41cb-33e2-4898-bcf0-5ef0a706e761.png

あとがき

ご購入いただき、誠にありがとうございます。作者の愛根でございます。サモナーの作品って少ないかもって想って、作ってみたいと想って、拙筆ながら書かせていただきました。

文章の技量はないですが、愛情でごまかしております。この作品を愛していただけましたら幸いです。

この作品の執筆に工賃（ 時給 100 円 ）を提供してくれた B 型作業所サラダボウルに深く感謝するとともに、ご購入いただいたあなたに深く感謝し、あなたの未来に幸せと繁栄があるように節に願います。

またどこかで、私の作品に出合いましたら、手に取っていただけると嬉しいです。あなたが幸せに天国に行けますように、深くお祈りいたします。アーメン☆彡

林愛根

召喚士エストリアと愉快な仲間たち

著　者　　林愛根

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社